

## 第24回 国際パネルディスカッション

### 「これからの石油・エネルギー情勢をどう見るか」

2015年2月5日(木)

経団連会館国際会議場

#### 開会挨拶

(一財)日本エネルギー経済研究所 理事長

豊田正和氏

#### パネルディスカッション

<パネリスト>

FACTS グローバルエナジーグループ会長

フェレイダン・フェシャラキ氏

Sierra Oil & Gas 社長

イワン・R・サンドレア氏

(一財)日本エネルギー経済研究所

常務理事 首席研究員

小山 堅 氏

(独)石油天然ガス・金属鉱物資源機構

上席エコノミスト

野神 隆之 氏

<司 会>

日本経済新聞社 編集局編集企画センター兼国際アジア部

編集委員

後藤 康浩 氏

#### 主 催

(一財)日本エネルギー経済研究所

J X日鉱日石エネルギー株式会社

J X日鉱日石リサーチ株式会社

要 旨
-----

### 1. 国際石油需要情勢展望

- 2015年の世界需要の伸びは総じて低調。米国のみ堅調。原油需要は、過去原油価格との相関関係が高かったが、現在新たなサイクルに入った状況〔フェシヤラキ氏〕
- 石油需要は経済成長の影響が強い。米国以外では、経済減速およびドル高が需要の足枷になっている。2015年の世界需要の伸びは、90万BDに届かない〔野神氏〕
- 過去数年の需要の伸びは極めて高かったが、構造変化により需要に対する期待値が変わった。過去のように年間150万BD増えるようなことはなく、今後2-3年需要は低迷する。〔サンドレア氏〕
- 新興国・欧州経済が減速、米国が世界経済牽引という構造は2015年も変化なし。今年の世界石油需要の伸びは100万BD前後。需要については、備蓄要因にも注意が必要〔小山氏〕
- OPECは、需給環境は今後しばらく弱いと考えている〔フェシヤラキ氏・サンドレア氏〕
- 経済減速で中国の石油需要は伸び悩み。補助金削減もありアジアの需要急伸は考えづらい。〔野神氏〕

### 2. 国際石油供給情勢展望

- 供給力の増大は、ここ数年米国・カナダ・ブラジル・イラクに集中。過去100年で年間の供給の伸びが100万BDを超えた年は20回で、過去7年の内4年間にこれに該当、ここ数年の供給増は歴史的にもまれ。現在、世界全体で政治的要因などで300万BDの供給が停止中。今後は、NGLとカナダのオイルサンドは安定的に伸びていく〔サンドレア氏〕
- 地政学リスクの観点から、今年はイラン核開発問題にも注目したい〔小山氏〕
- 過去4-5年の米国LTO増産は、OPEC内に第2の産油国が新たに出現したのと同程度のインパクト。もはや石油供給はOPECを超えた問題。米・露両国は現在各々1000万BDの原油生産量だが、近い将来どちらもサウジを超える生産能力を持つ。供給過剰は4-5年かけないと解決しない。ボラティリティーと低価格への対応能力が重要〔フェシヤラキ氏〕
- 日本は15年以内に石油需要が5割減るという大変動期に突入。日本の需要減は不可逆的で石油業界の再編は必至。現在5社ある大手元売りは2-3社に集約される〔フェシヤラキ氏〕
- 米シェールオイル、全生産量の8割が2割の生産地から産出。シェールガス・オイルの経済性は可変的なもの。深海油田生産は現在約600万BDだが、減退率が高く将来は伸びない。リスクの高い海上から、有利な陸上へと開発地域がシフト中〔サンドレア氏〕
- 中期的に世界の需給で重要なのは米シェールオイル。60ドルくらいで米国シェールオイルの2割が採算割れに。しかし油価下落から生産減退までにはタイムラグがある。〔野神氏〕
- 80年代半ばや90年代の低油価の時期に、石油産業は生き延びる対応力を鍛え上げてきた。今後関連産業がどうコストを下げ、新しい均衡価格で生きていくかに注目。〔小山氏〕
- 原油価格は、今年第3四半期に50~55ドル、第4四半期に50~60ドル、2016年に60~70ドル（いずれもブレントベース）と考えている〔フェシヤラキ氏〕
- 短期的には第1四半期でWTI45ドル程度まで下落する場面もあるか。第2四半期には60ドル程度まで切り上がる。その後今年中は50~70ドルで推移〔野神氏〕
- 昨年12月にエネ研が発表した見通しのとおり。つまり2015年通年で平均60ドル。前半は

これより低く、後半はこれより高い。2020 年前後には 80 ドルまで上昇 [小山氏]

### **3. 天然ガス・LNG 情勢の展望他**

- 2015 年は、世界 LNG 需要全体で 2 億 5,000～2 億 5,500 万 t、供給は 2 億 6,000 万 t 超。供給過多でかつ原油価格低迷で価格も低下。北米産のガス輸入は引き続き重要 [小山氏]
- 日本の原発稼働率 15%を前提にするとガス需要は伸びない。この状況下では長期契約は頭打ちで短期・中期契約が伸びる。油価連動方式の方が価格が高く、ヘンリーハブ連動だと安いという単純な図式ではない。契約方式が異なるだけだ [フェシャラキ氏]
- 米国のガス価が安いのは安い石炭と競合関係にあるため [野神氏]
- 需要面ではアジアと中南米での伸びが期待できる。供給面では一部の高コストプロジェクトは見直しとなる。小さくとも新技術を採用のプロジェクトに期待 [サンドレア氏]
- これから 5 年間はスポット価格は大体 7～8 ドル/百万 BTU くらいに収れんする。現在日本のガス価が高いのはオイルリンクが理由ではない [フェシャラキ氏]
- 日本の企業がヘンリーハブリンクに活用しようとしたのは、想定された価格面での有利性だけでなく、新しい供給ソースから自由度の高い供給を獲得することが目的だった。アジアのバイヤーは市場の需給状況を見極めて、それを「活用する」戦略が重要 [小山氏]
- 米国からのシェールガスの大量輸出に関しては疑問視している [サンドレア氏]
- 米国のシェールガス開発は不確実性が高まっており、実現は計画の 3 割程度か [野神氏]